

# 「下さい」と「ください」を正しく使い分けていますか？

——ほかにも「見る/みる」「言う/いう」「置く/おく」などは？——

How to choose the appropriate form of “kudasai” with kanji or hiragana.

有限会社 アトリエ・ワン

貝島良太

Ryota KAIJIMA

「クリックしてください」と「クリックして下さい」はどちらが正しい書き方だろうか。「クリックして下さい」と書く人が多いが、正解は「クリックしてください」の方である。けっこう多くのマニュアルや説明プレートなどの文章でまちがった使われ方をしているのを目にする。本動詞のときには漢字表記で「下さい」と、補助動詞のときには平仮名表記で「ください」と使い分けなくてはならない。ほかにも「見る/みる」「言う/いう」「置く/おく」「来る/くる」など、漢字と平仮名の使い分けが必要なものがある。それらを整理してみよう。

## 1. はじめに

取扱説明書、パンフレットや製品に付ける説明プレートなどの記載は、正しい用字用語表現で書かれていないと、製品の品質も色あせて感じられるものである。誤字脱字など不注意によるものは言うに及ばないが、認識不足による漢字と平仮名の不適切な使い分けには注意を要する。中でも、「クダサイ」という言葉がその用法により、「ください」と「下さい」とが、適切に区別して表記されているのは半分以下のように感じられる。

全部「下さい」で統一している、なぜなら、「ください」を使うと、漢字を知らないようで格好悪いし、文字数制限がある場合など、3文字ですむ「下さい」の方が便利だという人も少なくない。テレビのテロップ文字などでも「下さい」が多用されていて、なぜ今さら使い分ける必要があるのかと思うようである。筆者も10年くらい前までは「下さい」ばかり使用していた。

筆者が、「クダサイ」の表記の使い分けをしなくてはいけなかったことを知ったのは、業務上の必要に迫

られて、一般的な文章表現について勉強しようと日経B P社発行の『文章・用語ハンドブック』を見たときからである。

## 2. 国語辞書、用字用語集などでの説明

『文章・用語ハンドブック』の「漢字とかなの使い分け」の一覧表には、「クダサイ」について、

使う	使わない	品詞
：	：	：
極める	きわめる	動
下さい	ください	動
～ください	～下さい	補
くまなく	隈無く	副
：	：	：

と、非常に簡潔に表示されている(204ページ)。品詞欄の「動」は動詞を、「補」は補助動詞を表している。すなわち、『漢字の「下さい」は「クダサイ」が動詞の場合に、平仮名の「～ください」は「クダサイ」が補助動詞の場合に使う』ということである。そこで、国語辞典や新聞社などが出している用字用語集でそのことがどのように書かれているかチェックしてみた。用字用語集のなかには「ク

「クダサイ」の使い分けについて触れていないものも多い。

国語辞書の代表として『大辞林』を見てみると、『ください【下さい】[一][動詞「下さる」の命令形。本来は「くださいませ)で、その「ませ)の略された形] ①相手に何か物事を請い求める意を表す。いただきたい。ちょうだいしたい。「小遣いをー」「お電話をー」「これー」②(補助動詞)(ア)動詞の連用形に「お」の付いた形、動作性の漢語に「ご(御)」の付いた形、動詞の連用形に「て(で)」の付いた形などに付いて、相手に何らかの動作をすることを請い求める意を表す。「どうぞお読みー」「ぜひご検討ー」「名前を書いてー」(イ)(「・・・(さ)せてください」の形で)自分の行動について相手の許しを求める意を表す。「私にもひとこと言わせてー」「それは私に担当させてー」[二]動詞「下さる」の連用形。「くださいます」の形で用いられる。[⇒]くださる』(716 ページ)とある。

用字用語集の代表として、共同通信社発行の「記者ハンドブック第11版」を見てみると、

『「ください・くださる (を)下さい・(を)下さる お手紙を下さい、しばらくの猶予を下さい、褒美を下さる」、「・・・ください (して)ください(補助動詞の場合)ご検討ください、ご注意ください、ご了承ください」』(203 ページ)とある。

以上をまとめてみると、「クダサイ」(終止形は「クダサル」)には、名詞+「を」などの助詞+「クダサイ」のように動詞として本来の意味を表す機能(あえてこれを「本動詞」と呼ぶ)と、直前の動詞の連用形に続いて、別の意味やニュアンス(「クダサイ」の場合は丁寧さ)を添える補助動詞としての機能のふたつがある。そのような場合、本動詞のときは漢字、補助動詞のときは平仮名で書くという規則がある。

### 3. 簡単な使い分け規則 (人用)

上記の説明は、「クダサイ」が本動詞とし使われているか、補助動詞として使われているかを区別して、漢字と平仮名を使い分けるといものである。

しかし、区別が難しい場合もある。そこで、筆者は次のように簡単な使い分け規則を考案した。

「クダサイ」の本動詞としての意味は、物のやり取りに関するもので、英語の give に相当するといえる。いっぽう、補助動詞として丁寧な意味を込める場合は英語の please に相当するといえる。これを漢字と平仮名で使い分けようというものである。

これでいくと、冒頭に提起した「クリックしてクダサイ」は、pleaseにあたるので、平仮名で「クリックしてください」と書くのが正解ということになる。いっぽう「A4の紙をクダサイ」はどうであろうか。これは物のやり取りであるから、本動詞としての give なので、「A4の紙を下さい」と書くべきである。

以上をまとめると、

「クダサイ」が、本動詞(give)⇒「下さい」

「クダサイ」が、補助動詞(please)⇒「ください」ということになる。

### 4. 使い分け規則 (コンピューター用)

コンピューターによる文書処理で、「クダサイ」を意味的に give と please で区別して、漢字と平仮名を使い分けるのは、それなりのAI機能(意味処理)が必要になるが、筆者は、それを機械的に解決する簡便法を提案してきた。以下にそれを説明する。

#### 本動詞(=give=「下さい」)の場合の原則：

「クダサイ」の直前の文字が、「を」「が」「は」など体言の直後に来る10種類の助詞(例：返事をクダサイ)と語尾が「く」の副詞(例：早く)の場合は、「クダサイ」の意味は本動詞(give)なので「下さい」と漢字にするのが原則として正しいことになる。

#### 補助動詞(=please=「ください」)の場合の原則：

いっぽう、「クダサイ」の直前の文字が「て」「で」「し」など動詞の連用形の活用部分の場合(例：読んでクダサイ)は、「クダサイ」の意味は補助動詞(please)なので「ください」と平仮名にするのが原則として正しいことになる。

すなわち「クダサイ」の直前の1文字(あるいは2

文字)を見ることで、特別難しい意味処理をしないでも、「クダサイ」が give か please かをほとんど正確に区別できる。もちろん、例外あるいは同じ文字に両方の意味があり、本当に意味処理をしない限り判別が付かないものもあるが、それらはごく少数である。使い分けの一覧を表1に示す。

表1 下さい/くださいの使い分け規則

A	B	C	D	E	
体言 の場合 [giveの意]	目的物 (もの:本)	を	下さ		
	目的者 (ひと:ぼく)	に			
	主格 (ひと:母)	へ			
		から			
		が			
	主格 (ひと:わたし)/ 目的物 (もの:パン)	の			
		と			
も					
は					
	より				
	まで (迄)				
	副詞 (早)	く			
用言 の場合 [pleaseの意]	(ご)+サ変動詞の語幹 (了承/覧)		くださ	い ら り る れ ろ っ	
	動詞の連用形 (～し、食べ、乗っ)	て			
	動詞の連用形 (～しない、飲ん)	で			
	お	動詞の連用形 (会)			い
		動詞の連用形 (教)			え
		動詞の連用形 (書)			き
		動詞の連用形 (嗅)			ぎ
		動詞の連用形(助)			け
		動詞の連用形 (上)			げ
		動詞の連用形 (示)			し
		動詞の連用形 (命)			じ
		動詞の連用形 (聞か)			せ
		動詞の連用形 (撫)			ぜ
		動詞の連用形 (立)			ち
		動詞の連用形 (当)			て
		動詞の連用形 (茹)			で
		動詞の連用形 (尋)			ね
		動詞の連用形 (並)			び
		動詞の連用形 (並)			べ
		動詞の連用形 (読)			み
動詞の連用形 (閉)		め			
動詞の連用形 (取)	り				
動詞の連用形 (離)	れ				

表1の二重線より上の部分が、体言に助詞を介して「クダサイ」が付く場合で、本動詞で「下さい」と漢字にすべきものである。

二重線より下の部分が、用言の連用形の後に続く補助動詞であり、平仮名で「ください」とすべきものである。B列のかっこ内に用例を示してある。まず、本動詞(体言+助詞+「クダサイ」)の方から見てみよう。「クダサイ」の直前の文字が、「を、に、へ、から、が、の、と、も、は、より、まで」のときは、体言に続く助詞と考えられるので、「下さい」と漢字にして差し支えない。また、「早く

や「ようやく」のように「く」で終わる副詞のときも、「クダサイ」は副詞に修飾される本動詞と考えられるので漢字にして差し支えない。

次に、「これクダサイ」のように、体言から助詞抜きで直接「クダサイ」に続く場合がある。これは口語ではよく使われるが、マニュアル文などの正式な文章では、「鉛筆下さい」とは書かずに「鉛筆を下さい」と、助詞「を」を付けるのが普通である。したがって、「クダサイ」の直前が表1のC列にならない場合は、「クダサイ」はすべて直前の「ご」を冠した動詞を丁寧に表現する補助動詞(ご+サ変動詞の語幹+クダサイ)であると推測される。「ご了承ください」、「ご覧ください」などである。このような場合の「クダサイ」はplease(補助動詞)に相当するので、平仮名表記として差し支えない。このほかに、動詞の連用活用語尾の「て」や「で」の直後の場合も「クダサイ」は please に相当するものと考えるのが妥当なので、平仮名の「ください」が適当である。また、例えば「お飲みください」のような丁寧な表現の「お+動詞の連用形」で五段活用の「い、き、ぎ、し、じ、ち...」の「い」列の語尾と、「え、け、げ、せ、ぜ...」の「え」列の語尾の直後の場合も、「クダサイ」は please に相当するから、平仮名が適当である。「お+動詞の連用形」の場合の「て」、「で」については、普通の動詞の連用形のところの「て」「で」と重複するが、どちらにしても please に相当するから平仮名を使用することになるので問題はないことになる。「お+動詞の連用形」の場合の「に」については、連用形の活用語尾が「に」になる動詞は用例がほとんどない(「死ぬ」だけと思われる)ことから、体言+「に」+「下さい」の用法(例: ぼくに下さい)に絞ってよいと考えられるので補助動詞としての一覧から除いた。また、連用形の語尾が「ひ」「へ」になるものが現代仮名遣いでは見当たらないので一覧表から除いた。以上のように、「クダサイ」の直前の1文字または2文字を表1のC列のものと照合すれば、漢字にするか平仮名にするかが高確率で決定できるのである。

## 5. 類似の使い分けが必要な語

日本語には「クダサイ」のように、漢字と平仮名を使い分けるものがほかにもある。筆者が記者ハンドブック第11版で調査したところ、ほかに14件見つけることができた。50音順にまとめたものが、表2である。

表2 「クダサイ」以外で本動詞と補助動詞の区別に漢字と平仮名を使い分けるもの

読み	表記	例
アガル・アゲル	上がる・上げる	上げ潮、上げぶた、雨が上がる、浮かび上がる、腕前が上がる
	挙げる・挙がる	金星を挙げる、国を挙げて、犯人を挙げる、兵を挙げる
	揚がる・揚げる	いかりを揚げる、色揚げ、空揚げ、切り花の水揚げ、国旗を揚げる、たこ揚げ
	あげる	これを君にあげる、・・・してあげる、本を読んであげよう
アキ・アク・アケル	空き・空く	空き缶、時間を空ける、席が空く
	明き・明く	明け方、年が明ける、目が明く、らちが明かない、
	開き・開く	開け方が分からない、開け閉め、開け放つ、穴を開ける
	あき・あく	水をあける、ポストに穴があく・あける(抽象的な表現)
イウ・イエル・イワレル	言う・言える	言うまでもなく、言える範囲内、言わずと知れた
	いう・いえる	Aさんという人、あつという間に、いうなれば、いざというときに、経験がものをいう、こういう事情、ミシミシいう、・・・というわけだ
イタダク	頂く	頂き物、これなら頂きだ、賞状を頂く、雪を頂く
	いただく	飲食の「いただきます」、(来て)いただく、お読みいただく、出席していただく、ご出席いただく
イク	行く	行く先、学校へ行く
	いく	(物事が)うまくいく、実施していく、合点がいく、減っていく、満足がいく
イル	居る	居ても立ってもいられない、並み居る人
	いる	計算している、寝ている、呼んでいる
オク	置く	重きを置く、店員を置く、冷却期間を置く、三日置きに
	おく	預かっておく、言わせておく、整理しておく、調べておく
カエス・カエル	返す・返る	言い返す、生き返る、折り返し点、自然に返る、借金を返す、宙返り、引き返す、領土を返す
	帰す・帰る	家に帰る、帰り支度、帰りしな、領土が帰る
	かえす・かえる	三墨走者がかえる、ひながかえる

カカリ・カカル・カケ(ル)	係り・係る	係り結び、本件に係る訴訟
	架かり・架かる・架ける	架け替え、電線を架ける、橋を架ける
	掛かり・掛かる・掛ける	足掛かり、足場を掛ける、襲い掛かる、心掛ける、手掛ける、出掛ける、取り掛かる、拍車を掛ける、はしごを掛ける、働き掛ける、ハッパを掛ける、話し掛ける
	懸かり・懸かる・懸ける	命を懸けて、懸け離れる、神に懸けて誓う、賞金を懸ける、メツに懸けて、優勝が懸かる
キタ・クル	来た・来る	車が来た、春が来た、サンタがやって来る、朝が来る
	きた・くる	食事してきた、寒くなってきた、頭にくる、行ってくる、～してくる、静かになってくる、ぴんとくる
タス	出す	思い出す、出し抜く、首を出す
	・・・だす	動きだす、泣きだす、笑いだす
ツクリ・ツクル	作り・作る	歌を作る、形作る、基準を作る、実績を作る、作り事、作り話
	造り・造る	粗造り、家を作る、石造り、酒・しょうゆ・酢・みそを造る、施設を造る、自動車を作る、荷造り、船を造る
	つくり・つくる	愛人をつくる、ムードをつくる、裏金づくり、会社をつくる、環境をつくる、チャンスをつくる、制度をつくる、組織をつくる、体制づくり、体力づくり、街・町づくり、列をつくる
ミル・ミエル	見る・見える	足元を見る、憂き目を見る、テレビを見る、大目に見る、調子を見る、現場を見る、人を見る目、様子を見る
	診る	医者に診てもらう、患者を診る、脈を診る
	みる・みえる	意見を聞いてみる、様子を見てみる、考えてみる、食べてみる、試してみる、・・・とみられる、・・・とみる、先生がこちらへみえる
メグリ・メグル	巡り・巡る	巡り歩く、巡り合わせ、堂々巡り
	めぐり・めぐる	彼をめぐらうわさ、問題をめぐり紛糾

平仮名にするのは、主に補助動詞の場合であるが、「ぴんとくる」のように「来る」本来の意味が薄れているときに使うこともある。

## 6. そのほかの漢字と平仮名の使い分け

このほかに、意味による漢字と平仮名の使い分けは、常用漢字(1,945字)の表外文字や表外読みが

理由のもの、名詞と動詞の使い分けによる送り仮名を付ける付けないがあるので、注意が必要である。

常用漢字の表外文字や表外読みが理由で平仮名表記する例として、「ソソグ」がある。「注ぎ込む」意味を持つときは、「コップに水を注ぐ、全力を注ぐ、火に油を注ぐ」のように「注」という漢字を使う。しかし、「洗い落とす、すすぐ」の意味を持つときは本来の漢字が「濯ぐ、雪ぐ」で、常用漢字ではあるが読みが指定(濯=タク、雪=ゆき・セツ)外であるので、平仮名表記とせざるを得ないのである(例：汚名をそそぐ)。

もとが表外漢字のため平仮名にする例として、「カウス」がある。交換、交差の意味の方は「交わす」で、「握手を交わす、言い交わす、酒を酌み交わす、契約書を取り交わす、話を交わす」のように使う。「避ける、外す、そらす」の意味の方は本来「躲す」であるが、「躲」が表外字のため「かわす」と平仮名とし、「身をかわす、矛先をかわす、先行馬をかわす、鼻差でかわす」のように書くことになる。

いっぽう、名詞と動詞の使い分けの例としては、「受付/受け付ける」や「見積/見積もる」がある。前者は、場所、係、書類名など(名詞)の場合、後者は「受け付ける/見積もる」という動詞の場合である。ちなみに動詞の場合に「受付け」のように最初の動詞の送り仮名を省略するのは送り仮名の規則では正しくない。

## 7. 終わりに

ワープロの打ち間違いミスは、ワープロソフトに付いている文書チェッカーでかなり拾えるが、一番よいチェック方法は、執筆者による校正(読み直し)後に、時間のある限り、別の人に読んでもらうことである。その場合でも、本動詞と補助動詞の区別、常用漢字の表外字・表外読みの知識、名詞形と動詞で送り仮名が変わることなどを知らなくては、せっかくチェックをしても正しい結果が得られない。現在、国語審議会が常用漢字の見直しをしているが、その結果により使える漢字が少し増える可能性がある。マニュアルも製品の重要な

一部であるから、当然マニュアル関係者は不断の努力をもって、使用する用字用語の表記の知識も最新のものにしておかななくてはならない。

\* \* \*

### 【参考文献】

- 貝島良太 (有)アトリエ・ワン 2003 「ください」と「下さい」を **SuperHT<sup>3</sup>** で正しく使い分け —「および/及び」はどちらが正しい?— TC シンポジウム'03 論文集、36-40 ページ
- 『大辞林(第2版)』 松村明[編] 三省堂 1995
- 『文章・用字用語ハンドブック』 テクニカルコミュニケーション研究会編 日経 BP 出版センター 2000
- 『日本語を知る・磨く ことばの表記の教科書』 佐竹秀雄+佐竹久仁子著 ベレ出版 2005
- 『記者ハンドブック 新聞用字用語集 第11版』 共同通信社 2008
- 『現代用語表記辞典』 小学館 1997
- 『新聞用語集』 新聞用語懇談会編 日本新聞協会 1996
- 『改訂新版 読売新聞用字用語の手引』 中央公論新社 2008
- 『改訂新版 朝日新聞の用語の手引』 朝日新聞社 2007
- 『改訂新版 毎日新聞用語集』 毎日新聞社 2007
- 『NHK新用字用語辞典 第3版』 NHK放送文化研究所編 2008

有限会社アトリエ・ワン (Atelier Bow-Wow)

**SuperHT<sup>3</sup>** 事業室 取締役室長 貝島良太

e-mail: rkajima@bow-wow.jp

URL: <http://www.bow-wow.jp/sht3/>

Tel/Fax: 03-3351-0058